

水のまち 焼津

元高等学校長 長谷川 勝治

水揚げされる魚は鮮魚でも活魚でもない。カチカチに凍った大量のカツオやマグロ類。コンベアやクレーンで大型船から運び出された先には保冷車が待っており、そのまま冷凍庫へ。その後、市内のあちこちにある鰹節、缶詰工場などへと運ばれ商品化されていきます。焼津は一大水産都市です。

そんな焼津には魚以外にもいくつかの宝があります。そのひとつが“水”。何しろ焼津は大井川が長い長い時間をかけて運んだ土砂が堆積してできたところ（志太平野）、つまり大井川が造ってくれたまちなのです。市内には至る所で湧水が出ており、住民はその水を飲み水にしています。またその昔は大井川であったであろう地域を流れる川を利用して農業用水としても、以前にはウナギ養殖用の水としても利用されてきました。将来、水不足が危惧されるなか、焼津の住民は贅沢な生活をさせてもらっているといえましょう。

ところが最近、不安なニュースが入ってきました。リニア新幹線が大井川の水源である南アルプスにトンネルを通す計画を進めています。水への影響はトンネルを掘ってみなければ分からないとのこと、大変無責任な話です。影響が出てからでは遅いのです。それでも上流のダムによる水の堰き止めは、発電の他、工業用水や農業用水、飲料水として使われており、その分水量の減少、流出土砂の減少に繋がっています。

この影響は焼津市民にも及ぶことになって来ます。宝である湧水量の減少または出なくなることへの心配です。なってからでは取り返しがつきません。ならないように守ることが肝要です。

さらに心配するのが“**海岸侵食**”。和田浜海岸から一色海岸にかけて、60年前と比べて約100mは削られており、現在も進行中です。テトラポットなどで補強をしていますが、根本的な解決策にはなりません。このままいくと、いずれ志太平野は「**志太湾**」となり、平野の海岸部分にある焼津は、海中へと没して行くことになるでしょう。

川の持つ潜在的な機能を見失い、産業発展のみに傾注した結果は、結局地球を壊し、人類を脅かすことに繋がっていきます。今からでも遅くはありません・・・。

(2019年7月29日／日本の水を守る会への寄稿文)